

# 平成 23 年度主任者部会年次大会 (第 52 回放射線管理研修会) アンケート調査のまとめ

## 平成 23 年度主任者部会年次大会実行委員会

平成 23 年 11 月 1 日(木)、2 日(金)の 2 日間にわたり、平成 23 年度主任者部会年次大会(第 52 回放射線管理研修会)が、山形テルサにおいて開催された。実行委員会は年次大会をより良いものとするため、参加者全員にアンケート調査を行っており、ここにその集計結果を報告する。アンケートは、一般参加者を除いた参加者総数 403 名のうち 182 名(45%)から回答を得た。

### 1 参加者について

#### 1-1 性別・年齢

性別は、“男性” 149 名(82%)、“女性” 19 名(10%)、無回答 14 名(8%)であった。年齢構成は“20 歳未満” 0 名(0%)、“20 歳代” 9 名(5%)、“30 歳代” 31 名(17%)、“40 歳代” 58 名(32%)、“50 歳代” 55 名(30%)、“60 歳以上” 20 名(11%)、無回答 9 名(5%)。回答者の 6 割ほどが 40~60 歳の男性であった。

#### 1-2 所有免状・役職

参加者の所有免状は“第 1 種” 149 名(82%)、“第 2 種” 12 名(7%)、“第 3 種” 3 名(2%)、“医師・歯科医師” 1 名(1%)、“薬剤師” 10 名(6%)、“なし” 6 名(3%)、無回答 13 名(7%)。役職は“事業所長” 0 名(0%)、“管理職” 35 名(19%)、“一般職” 55 名(30%)、“教育・研究職” 51 名(28%)、“医療従事者” 27 名(15%)、“その他” 10 名(6%)、無回答 9 名(5%)。ここでは複数回答があり、それぞ

れに加算した。8 割ほどが第 1 種免状所有で、一般職と教育・研究職が約 6 割を占めていた。

#### 1-3 主任者選任、アイソトープ協会会員、主任者部会会員

主任者選任の状況は“選任” 124 名(68%)、“非選任” 45 名(25%)、無回答 13 名(7%)。日本アイソトープ協会への入会状況は“会員” 122 名(67%)、“会員外” 50 名(28%)、無回答 10 名(6%)。このうち“主任者部会会員”は 98 名(54%)、“会員外” 70 名(39%)、無回答 14 名(8%)であった。主任者部会会員外 70 名のうち、20 名は日本アイソトープ協会の他部会の会員である。

#### 1-4 参加頻度

参加頻度については、“毎年” 87 名(48%)、“隔年” 11 名(6%)、“時々” 37 名(20%)、“今回が初めて” 35 名(19%)、無回答 12 名(7%)。1-3 で示した日本アイソトープ協会会員外 50 名のうち、初めての参加者は 24 名(初参加者のうちの実に 69%)、毎年参加者は 12 名。会員の勧誘をするのには年次大会が絶好のチャンスであろう。

### 2 参加者の所属事業所について

#### 2-1 事業内容

参加者の所属事業所は“医療機関” 28 名(15%)、“教育機関” 72 名(40%)、“研究機関” 37 名(20%)、“民間企業” 45 名(20%)、無回答 9 名(5%)、ほかに“行政機関” 1 名(1%)

## 主任者 コーナー

という記述があった。ここでも、複数回答については、それぞれに加算した。

### 2-2 使用形態

ほとんどが“許可使用”154名(85%)であり、以下、“届出使用”15名(8%)、“販売業”4名(2%)、“賃貸業”0名(0%)、“廃棄業”1名(1%)、“放射性医療品製造”3名(2%)、“機器メーカー”0名(0%)、“使用していない”7名(4%)、無回答9名(5%)であった。

### 2-3 施設

“非密封RI施設”123名(68%)、以下、“放射線発生装置使用施設”61名(34%)、“密封RI施設”78名(43%)、“設計認証機器使用施設”16名(9%)、“非破壊検査施設”3名(2%)、無回答(15名, 8%)。複数回答については、それぞれに加算した。

### 2-4 所在地

“北海道”6名(3%)であり、以下、“東北”18名(10%)、“関東”64名(35%)、“中部”24名(13%)、“近畿”30名(17%)、“中国・四国”21名(12%)、“九州”10名(6%)、無回答9名(5%)。山形県開催の年次大会であり、東北地方在住の方は比較的参加しやすいのではないかと思っていたが、案外少なく、少し残念であった。

### 2-5 放射線業務従事者数

“0人”6名(3%)であり、以下、“20人以下”45名(25%)、“21~40人”27名(15%)、“41~60人”23名(13%)、“61~80人”6名(3%)、“81~100人”14名(8%)、“101~200人”19名(10%)、“201~300人”8名(4%)、“301人以上”13名(7%)、無回答21名(12%)。半数は、60名以下の事業所であることが分かる。

### 2-6 選任主任者数

“0人”7名(4%)であり、以下、“1人”70名(39%)、“2人”55名(30%)、“3人”20名(11%)、“4人”6名(3%)、“5人”2名(1%)、

“6人以上”4名(2%)、無回答18名(10%)であった。

### 3 今回の年次大会について

プログラムごとに5段階(5点=良い, 1点=悪い)で評価を記載してもらった。評価と平均点の分布を図1に示す。プログラム全体の評価点は4.0であり、全体として「良い」という評価であった。寄せられたコメントは「情報収集ができた」「参考になった」「タイムリーな内容」等、おおむね好評であったが、「主任者部会としての主張がはっきりしなかった」「震災後の主任者の役割について議論が必要」といった今後の課題となる意見も寄せられた。また「教育訓練の参考にするため、演者の資料等をCDで配布したりダウンロードできるようにして欲しい」という要望もあった。次回以降の年次大会で検討いただきたい。

#### 3-1 部会総会

5段階評価で1~5のいずれかの点をつけた回答(すなわち不参加と無回答を除いた回答)のアンケート全回答(182件)に対する割合は、このプログラムについては78%であった(以下、これを有効回答率という)。プログラムの中では不参加や無回答の割合が比較的高い。「報告は例年と変わらず形式的、セレモニー」「部会の総意をまとめる場として時間を割くべき」といった辛口のコментарが目立った。部会総会の運営を担当している企画委員会において今後の参考にされたい。

#### 3-2 特別講演1(放射線安全行政の現状)

有効回答率は95%と高い。「新鮮味に欠ける」「同様の内容は別の機会に聞いた」「新しい内容が欲しい」というコメントが多いが、同時に「参考になった」「内容が濃い。もう少し時間をかけて」という肯定的な意見も少なからずあり、年次大会で初めて行政側の講演を聞く人も

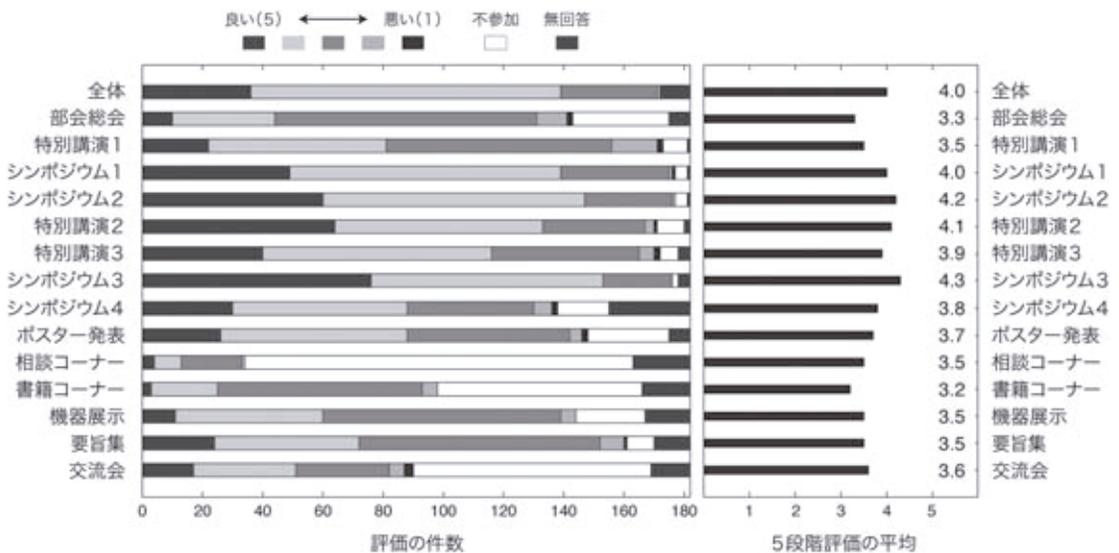


図1 アンケート結果

多いと考えられた。

### 3-3 シンポジウム1 (東日本大震災と施設維持管理の課題)

有効回答率は97%と高い。「現場の声が聞けて参考になった」「今後活用する」「タイムリーだった」というコメントが多かった。「議論不足」「もっと具体的な内容が欲しい」という意見もあった。

### 3-4 シンポジウム2 (原発事故と環境放射能計測)

これも有効回答率は97%と高い。「タイムリーな話題で興味深かった」「非常に参考になった」と好評なコメントが多かった。「今後も経過を聞きたい」という将来への期待もあった。

### 3-5 特別講演2 (原子核研究はパンドラの箱か)

一般にも公開した大槻義彦氏の講演で、有効回答率は94%。「非常におもしろかった」「話の組み立てがうまい」「ユーモアのある講演」「人を飽きさせない」といったコメントが多か

った。主任者も一般の人に講演する機会が増えて、話術という面で参考になったものと思われる。「大槻氏のような発言力のある人がもっと市民に正しい情報を知らせるべき」という意見もあった。

### 3-6 特別講演3 (放射線防護の国際的枠組みと事故時対応)

有効回答率は95%。コメントでは「参考になった、有意義だった」という好評価がある一方で「基礎的な内容すぎる」「内容を絞って欲しい」という意見も多かった。この問題に対しては聴く側に知識や認識の差があって、もっと掘り下げた内容を期待している人もいることがうかがわれた。

### 3-7 シンポジウム3 (放射線の人体への影響を考える)

有効回答率は97%、平均点も4.3と最も評価が高かったプログラムである。「分かりやすい」「今後一般の人に説明する上でたいへん参考になった」と好評であった。「もっと深く知りた

## 主任者 コーナー

かった」「このセッションはもっと時間が欲しかった」という意見もあった。

### 3-8 シンポジウム4(教育訓練の向上を目指して)

有効回答率は76%と低かったが、コメントは「今後の参考になった」「教育訓練の内容の漏れをなくす上でよい資料となった」といった好評なものも多く、参加者にとっては有意義なシンポジウムだったようである。「資料が欲しい」「教育訓練用のスライドの提供があればよい」「ホームページで公開してはどうか」といった要望も多かった。

また「業務従事者は高等教育を受けた者ばかりではない。より分かりやすい教育訓練の方向性も必要」「法令で項目と時間数が定められている新規教育訓練は対応しやすい。むしろ再教育のアイデアが欲しい」といった意見も寄せられた。このテーマは関心が高く、今後の発展が期待される。

### 3-9 ポスター発表

有効回答率は81%、平均点は3.7であった。当初予定の締め切り時点では、申し込みが数件であったが、最終的には例年の2倍近い39件の申し込みとなった。このため、急遽会場を追加して2会場に分けて開催することとなったため、「会場が狭い」「発表時間が短い」との意見が多かった。

しかし、発表件数の半数を占めた原発事故関連など、関心の高いテーマが多く、「活発だった」との意見が多く寄せられた。

### 3-10 相談コーナー

相談コーナーには「場所が悪い(分かりにくい)」との意見が寄せられた。参加者の休憩室を兼ねていたのもっと利用者があるかと考えていたが、残念ながら参加者は34名で有効回答率は20%であった。しかし、主会場入り口付近のざわついた雰囲気と比べると、ゆっく

りと情報交換ができたのではないかとと思われる。なお、「2日目も開催してほしい」とのコメントもあった。

### 3-11 書籍コーナー

設置場所は受付付近とすることが多く、それほど広いスペースをとることができなかった。このため、「狭い」「PR不足」との意見があり、平均点も3.2と伸び悩んだ。

なお、「教育用パワーポイントも販売してはどうか」との意見があった。ほかの項目でも「講演資料を公開してほしい」という意見が多く、今後検討する必要があると思われる。

### 3-12 機器展示

会場が分かりやすかったことから、アンケート回答者の約80%の参加があり、「参考になった」との意見が多く寄せられた。一方、分析装置への関心が高かったためか、展示のみでなく“装置の実演”を希望する意見があった。

### 3-13 要旨集

有効回答率は88%であった。要旨集を「CDで供給してほしい。ダウンロードしたい」などの意見があった。日本アイソトープ協会のホームページからのダウンロードにはID管理などの課題もあるが、今後は検討する必要があるだろう。

なお、「見やすい」との意見がある一方、掲載した内容の更なる充実を求める意見も多く寄せられた。

### 3-14 交流会

山形県での開催を楽しんでいただけるように企画した点は好評であったが、「東北の日本酒が欲しかった」などの意見が多くあった。また、「料理が少ない」などのコメントがあり、平均点も3.6であった。

ほかの学会等の懇親会に比べて参加費が安く、参加者の要望に応えるには参加費の見直しが必要かと思われる。

4 主任者部会の活動について

4-1 興味のあるテーマ、今後取り入れてほしいテーマ

参加された方にとって、興味のあるテーマまたは取り入れてほしいテーマを図2に示した。“教育訓練 (41%)” “緊急時対策 (40%)” “社会貢献 (34%)” や “記帳記録 (24%)” などが例年と同様に上位に入っている。福島第一原子力発電所事故の影響があったためか、“測定” を挙げた方が25%となっていることが、今回の年次大会での特徴である。ほかにも原発事故関連の項目として、リスク評価や地域住民への対応などがあつた。また、クリアランスの動向、特に加速器関連施設での廃止についての意見もあつた。

4-2 各支部での教育訓練講習会

各支部が開催している教育訓練講習会では、開催頻度は適当が76%、少ないが6%であつた。「地方支部でもできれば年2回程度必要」、「回数が多ければよい」など、開始頻度を検討してほしいとのコメントがあつた。

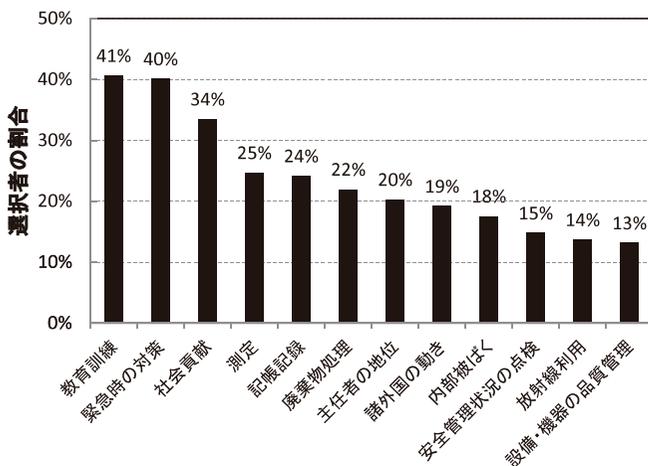


図2 主任者部会活動の興味あるテーマ (10%以上のテーマ)

また、講習内容は適切が74%、不適切が2%であつた。“文系の学生に対する (将来の先生となる学生) 教育の充実” についての意見があつた。

その他、「教材をCDで渡して欲しい」「密封関係が少ない」などの意見が寄せられた。運営スタッフの少ない地方支部には難しい点もあるが、今後の検討項目として残すべきかと思われる。

4-3 年次大会の持ち回り開催

第36回年次大会を平成7年に東北支部が仙台市で年次大会を開催してから、全国7支部で順番に持ち回り開催をしてきた。今回の山形県開催で3回目のシリーズがスタートすることになる。

今回のアンケートでは、「支部の交流が進む」「東京のみでは参加者が偏る」や「主要都市以外の県で開催希望」など、持ち回り開催がよいという意見が76%であつた。

これに対し、「遠隔地では参加しにくい」「東京が便利」「地方開催は時間がとられる」など、地方開催に否定的な答えが6%あつた。

地方開催は支部委員を含め実行委員会のメンバーが何回も顔合わせすることで、地方活動の活性化につながるものであるが、開催地の交通の便やスケジュール設定など参加者への配慮も欠かせないものであると思われる。

4-4 その他主任者部会の活動について

今回の年次大会は放射性物質放出事故を受けて、計測や人体影響をテーマとしたプログラムを組んだ。部会活動全般に対して、「福島への対応について主任者部会独自の対応を明

## 主任者 コーナー

確にすべき」「会員の代表がしかるべき媒体を用いて発信すべき」「メディアなどに発信すべき」などの意見があった。また、「社会活動への期待」や「一般に対する活動」を求める声があった。

さらに、「パワーポイント資料のホームページでの公開」や「webでの閲覧」の要望があった。会員IDの適切な管理方法は検討の余地があるが、ほかの学会での運用などを参考に、公益法人移行を機会に情報公開に向けた対応が必要かと思われる。

### 終わりに

今回の年次大会は2010年の8月頃から各地の会場候補の見学をはじめとして、実行委員や講師候補のお願いなどほぼ順調に準備が進んでいた。しかし、2011年3月11日の東日本大震災以降、仙台地区のスタッフやその家族には人的被害はなかったものの、長期にわたる停電や断水、燃料不足など通常の生活に戻るまで、開催準備の停滞を余儀なくされた。また、会場として選んだ山形テルサにおいても節電対策のため夕方5時からの新規会場予約を停止することや、開催期間中の緊急対応の具体策を策定するなど、多くの影響を受けることとなった。

5月頃からメインテーマやシンポジウムの構成、講師スケジュール調整など急ピッチで準備を進めた結果、準備万端とはいかないものの何

とか予定通りに開催することができ、400名を超える多くの参加があった。このような状況から、アンケートには大会スタッフの努力やテーマの選択などを評価していただいた一方、会場運営の不備など色々とお叱りのコメントも多くあった。大会事務局としてお詫びしたい。

ポスター発表では福島第一原発からの放射性物質放出事故を受けて、放射線量測定や環境分析などのモニタリングに関する多くの発表があった。施設の放射線管理責任者としての多様な業務以外に、放射線の専門家集団としてこれからも地域住民への対応や環境試料の測定などを長期にわたって継続することが必要となるであろう。今回の年次大会の講演やシンポジウムの成果が少しでも参加者に役立つものであったと願うものである。

不本意ながら、紙面の都合でここに記載した内容は記入いただいた意見のすべてではないが、皆様からの貴重な意見は次回開催の実行委員会に引き継ぐこととしたい。

山形県での年次大会に参加された皆様、アンケートに協力していただいた皆様には厚くお礼申しあげるとともに、被災された方、避難生活をされている方、放射線に不安をもたれている方そのほか大震災の影響を今でも受けられている方々に少しでも復旧と復興の日が訪れることを祈って筆を置くことにする。

(秋葉文仁、佐藤和則、泉 雄一)